

教務だより

2012年3月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

今終わったこと、そして始まること…。

茗溪塾塾長 宇野 雅春

今でも、目に焼き付いて忘れられない映像があります。昨年3月11日の津波にのまれた街での救出の様子です。激しく流れる濁流の中にひっくり返った車があり、その転倒した車の上に、かるうじて立っているお父さんと小さな子供2人。一人の手を引いて、一人を背中におぶっているのですが、助けを呼ぶわけでもなく、泣き叫ぶわけでもなく、その危うい位置にただただ呆然とたたずんでいる様子です。もし車が水で押されて更に転倒すれば、親子とも水の中に放り込まれ押し流されてしまいます。建物の中からロープをつけ救助に向かう人が大声で叫んでも、不安そうに振り返る父親は茫然として無言です。

無事に救出されるのですが、その静かな救出の様子に、大きな恐怖感を覚えました。

目前にある死と向き合っている小さな子供を抱えた父親の気持ちを考えてのことです。多くの人が、そういう風に命を落としていったのではないかと助かった人と、亡くなった人のほんの紙一重の差という事に、改めて気づかされた気がしたのです。

原発の事故もあって、日本の将来ということにも大きな不安を感じました。地震当日の深夜の帰り道、黙々と家へと向かう人々の長い行列も忘れられません。全く動かない車の列が延々と続いています。完全に麻痺した東京の街を歩きながら、明日からどうなるのかと暗澹としたのを覚えていました。

それから一年、受験は全て平常に行われました。地震の直後、思ったのは、阪神大震災のことです。受験生が必死で勉強していた1月にそれは起こりました。崩れた家屋からペンを握ったままで発見された女子高生もいました。あのときも多少の日程の変更がありつつも、受験自体は普通に行われたことが、頭に残っていました。

大地震で連日、TVは被害の報告、原発の方は予断を許さない状況が続き、計画停電で街は真っ暗。学校や塾も「休業」のところが多かったと思います。でも、一年後おそらく受験はいつも通りある、というのが私の頭の片隅にはありました。状況が落ち着くまで待つかどうかとも悩みました。余震がずーっと続いていましたから、生徒も休むケースが多くありました。塾に行かせるのが不安というご父母もいましたが、半年は続くと言われる余震や原発を考えると、その中でも、何とか生活活動を続けることが大切に思えました。実際に大きな被害を受けたのは東北地方を中心とした被災者の方です。被災者ではない私たちに出来ること。支援活動も大切ですが、そのバックボーンは、自分たちの生計です。

とにかく平常の活動を続けよう。塾全体での募金活動もしましたが、出来ることの限界を痛感したのも事実です。そうやって一年が過ぎました。まだまだ被災者に降りかかる災難は続いています。まだ行方不明の方が約5000人もいて、捜索が続けられています。そんな中で、受験があり、就職試験があり、世代はどんどん動いていきます。この波に飲み込まれてしまったまま時代は過ぎていきそうです。とにかく、「受験」が終わり、実践する時期から再び「考える時期」へ季節は移っていきそうです。もう一度、今自分たちがすべき事は何か？またしなければいけないことは何か？時代が変わり、世界が揺れ動いている中で、今日本の子供に本当に必要なことはなんなのか？うっかり忘れかけていたものが、震災を通じて、突きつけられているように思えてなりません。何も終わってはいないのですが、教え子たちは巣立って行きました。ここをひとつの区切りとして、もう一度、気を取り直して始めて行こうということでしょうか。やっとな春です。今年も塾として「受験を軸にできること」を求め続けていきたいと考えています。